

超域イノベーション博士課程プログラム

大阪大学 超域イノベーション博士課程プログラム運営チーム

超域イノベーション博士課程プログラムは、大阪大学の14研究科が連携し、現代社会の複雑な課題解決に資する高度な専門力と汎用力を備えた博士人材を育成を目的とする横断型教育プログラムである。民間企業、行政、自治体といった市民社会のアクターと協働して実際の社会課題に挑むプロジェクト型授業を実施し、異分野の学生が協働し解決策を提案する。修了生は学术界にとどまらず、産業界、行政機関などで幅広く活躍しており、新時代の博士人材のモデルとなっている。また、他分野・他業種をつなぐ新たなネットワークも形成されている。

総合知により目指すビジョン / 解決する社会課題

複雑化する現代社会課題に対し、高度な専門力と汎用力を備えた博士人材を育成し、超域的人材を継続的に輩出する。それにより、大学と社会の間に人と知の好循環を生み、「社会と知の統合」を体現する新たな教育・研究を実現する。

「矩」を超えた場づくり/参画しているステークホルダー

大阪大学の14研究科から大学院生、教員が参加している。14研究科にまたがる長期的なPhD教育は世界的にも稀で、修了生はネットワークを活かし大学院教育や社会との連携にも貢献している。

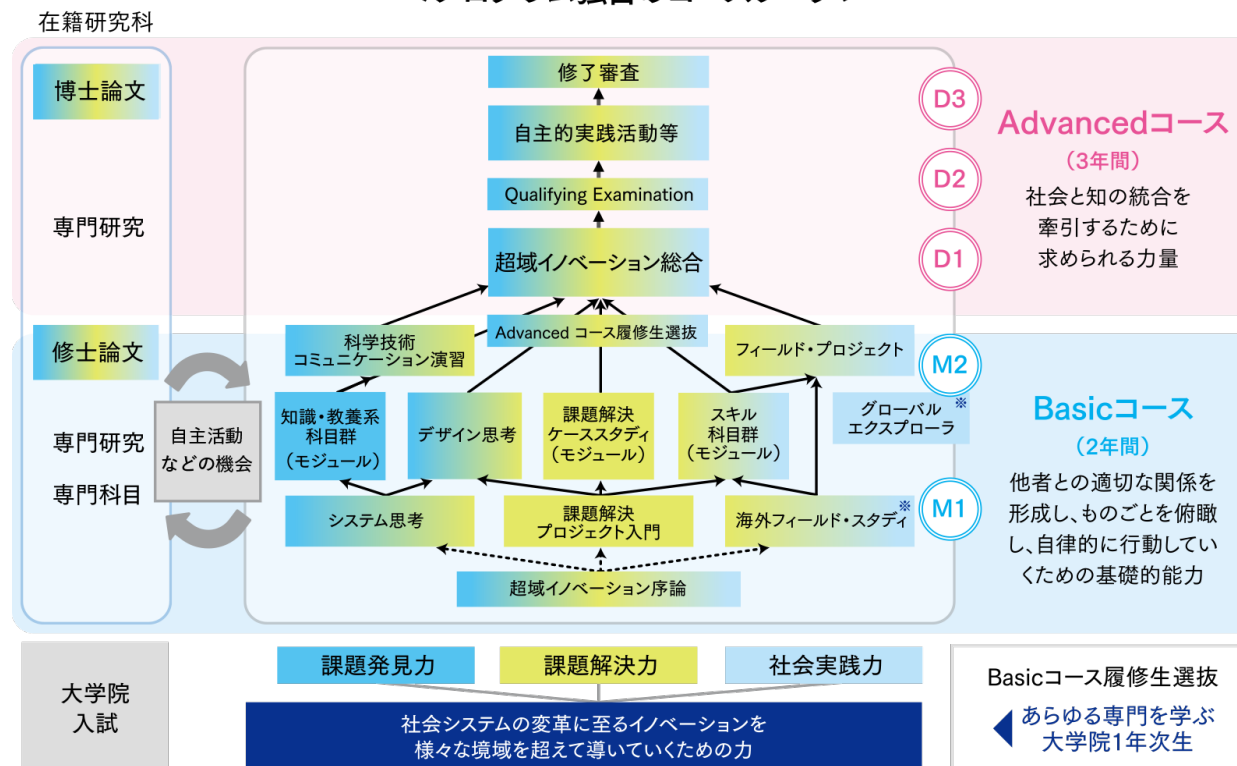
総合知人材の育成方法/育成方法の工夫

従来の専門教育に加え、システム思考・デザイン思考などのコア科目、俯瞰力を養う教養科目、国際性を高める海外活動支援、自主活動支援などを体系的に整備した。企業・自治体・NPOと連携したプロジェクト型科目を実施し、実践的な課題解決力を育成している。

“社会と知の統合”に向けたコースワークの体系

(5年制博士課程在籍者の場合 / 科目等は主要なものを抜粋 ※2019年度のもので)

<プログラム独自のコースワーク>



超域イノベーション博士課程プログラム ～文理を超えて14研究科を横断する大学院教育～

● 教育カリキュラムの基本構成

超域イノベーション博士課程プログラム※1コースワーク



超域イノベーション博士課程プログラムは、「社会と知の統合」を担っていく高度人材を育成する、5年制博士課程（博士前期課程・博士後期課程の区制および5年一貫制博士課程。一般には4年制学部卒業者が進学する。）および医歯薬系等の4年制博士課程（一般には6年制学部卒業者が進学する。）に在籍する学生に対する副専攻方式の特別プログラムです。本プログラムの5年間ないし4年間の課程は下記の2つのコースに分かれています。



Basicコースの履修にはAdvancedコースへの進学を前提とする本履修生とAdvancedコースへの進学を前提としない準履修生の2つの形式があります。2年制の修士課程に在籍する学生はBasicコースの準履修生の場合に限り履修することができます。

※1 本プログラムは大阪大学大学院学則第5条の6に規定されている博士課程教育リーディングプログラムの一つとして開設されています。

※2 Basicコース・ラーニングの部分は同第5条の7に規定されている大学院副専攻プログラム・大学院高度副プログラムに位置付けられます。

※3 博士課程（5年制・4年制）の1～2年次と修士課程も該当します。

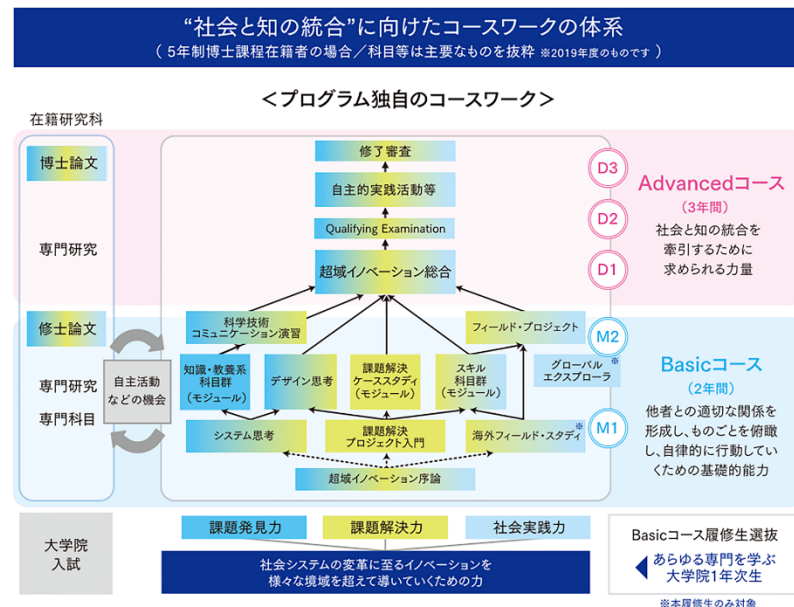
※4 博士課程（5年制・4年制）の3年次以降も該当します。博士課程（4年制）の場合、期間は2年間になります。

なお、Advancedコースの標準年限はプログラムの状況を鑑みて短縮される場合があります。

※5 編入試験については、定員の空き枠およびプログラムの実施状況を鑑みて試験実施の有無を判断します。

● コースワークの概要

本プログラムは、ひとりひとりの学びを展開しながら、新たに学ぶべきことを把握し、さらに必要となる知識を修得するという循環の中で、統合的な学びを達成することを目指しています。コースワークでは、現実の課題がどこにあるのかを発見するための調査力や理解力を高め、専門に裏づけられた確かな知識と応用力を修得し、そして高度な知識を実践の中で活かすことのできる汎用的なスキルを磨いていきます。



● コースワークの特色

文理統合型 学生参加型教育

本プログラムは、文理を横断する多様なバックグラウンドを持つ履修生が、専門や学年を超えて共に主体的に参画しながら切磋琢磨できるよう、学修の進展に応じた様々な規模のワークショップやプロジェクト学習による授業をコースワークに整備しています。

世界の中心と 周辺を知る

本プログラムでは、海外などでの経験を得る機会をコースワークに整備しています。履修生は、先進国の訪問だけではなく、いわゆる開発途上国での体験なども通じて、社会と知の統合の担い手に相応しい素養を身に付けることができます。

課題発見型から 課題解決型へ

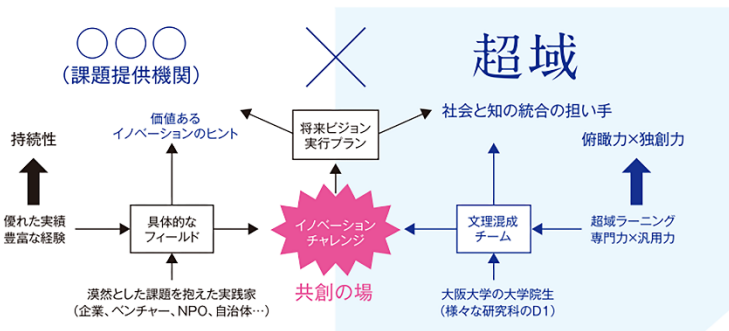
本プログラムでは、企業や行政などの学外の課題提供者と連携し、社会課題を発見し、それを解決へと導いていく力を身に付けるためのプロジェクト学習を学修の進展に応じてコースワークの各段階に整備しています。

Advancedコース(3年次～)のコア科目: 超域イノベーション総合

● コースワークの概要

超域イノベーション総合は、社会における実際の問題を取り上げ、状況の理解から問題の定義、その問題に対する解決策(フューチャープラン等)の立案に取り組む、8ヶ月の長期プロジェクト演習です。本プロジェクト演習を通して、カリキュラムや専門研究でこれまでに学んできた知識と経験とを結びつけ、さらに全く新しい、より複雑な状況で適用できるようになるための総合的な学びを目指しています。

具体的には、企業/自治体/NPO等に具体的な領域やフィールドをもった課題提供機関として御協力いただいています。多様な研究科から集まった超域プログラム履修生は、学際的な大学院生チームならではの、枠に囚われない発想で未来の姿を描きます。そして、現場観察やフィールドワーク、調査、プロトタイプ、検証をくり返しながら、現在の延長線上にはない“新しい価値創出”の提案に挑戦します。



<履修生の所属内訳>

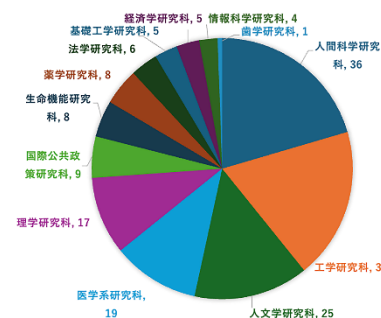
履修生の所属

▶ **全研究科から院生が参加**

教員も全研究科から参画し

運営・授業実施を担当

履修生の内訳【2012-2023】(人)



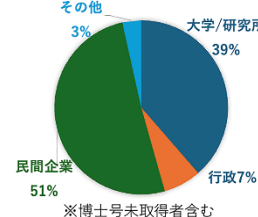
※人文科学研究科は言語文化研究科、文学研究科を含む

<履修生の進路内訳>

履修生の進路内訳【2023年度時点】

過半数(51%)が民間企業を選択

- 全国の博士号取得者の民間企業就職割合(34%, 内閣府調査, R5.)に比べて**民間企業就職割合が高い**。また**民間非研究職(総合職)への就職も多い**。
- プログラムでの取り組みにより**多様なキャリアパスを実現**



※博士号未取得者含む

アカデミア志望者の多くが常勤研究者(大学教員等)へ

- 超域履修生の**アカデミア志望者(22名)のうち18名(81.8%)が常勤の大学教員/研究員**として勤務、4名が学振PD、非常勤研究員等。これは学振DC採用者の博士取得5年後の常勤研究者割合(75.4%, 内閣府調査, R5.)よりも高い値

事前学習

4～5月

理解・共感

6月

課題定義・素案作成

7月

中間発表

8～9月

素案作成・検証

10月

骨子づくり

11～12月

最終発表

1月

報告書作成

2月

▶ キックオフ

課題提供機関と学生の初顔合わせです。企業/自治体/NPO等の概要、プロジェクトとして取り組む課題とその背景についての説明を受けた後、課題提供機関との打ち合わせを行い、今後の方向性や予定を議論しました。



▶ 進捗報告

プロジェクトの進行段階に合わせて、週に1回のペースで30分程度のレクチャーを受けました。レクチャーの中では教員から各段階に必要な考え方、手法等の補足が行われました。



▶ ミニレクチャー

7月には教員へ向けたの進捗報告会を行いました。教員からのフィードバックを受けて計画を修正するとともに、異なる課題に取り組む他のチームの進捗を知ることでモチベーションが喚起されました。



▶ 中間報告会

課題提供機関である企業/自治体/NPO等の関係者を招き、プロジェクトの進捗度合いを報告しました。ここでは各チームが実施した調査の結果や定義した問題、解決のプロトタイプを発表し、関係者からフィードバックをいただきました。いただいた意見をもとに方向性の修正および最終提案に向けた進行計画の調整を行いました。



▶ 進捗報告書

11月初旬には再び教員に向けた進捗報告会を行い、最終提案の素案を提示しました。プロジェクトの終結に向けて必要な事項の洗い出しを行いました。



▶ 最終発表会

プロジェクトの集大成として課題提供機関の関係者を招き、最終的な提案内容の発表を行いました。これまでに学んだ知識・技術を駆使して行った8ヶ月に渡る調査と議論を通じて見えてきた課題の本質を明らかにし、新たな価値を創造するビジョンとそれを実現するための実行プランを提案しました。



▶ ふりかえり

プロジェクト終了後、8ヶ月間の活動を通して得たそれぞれの学びの振り返りと共有を行いました。また活動を行った現地へ訪問して多くの関係者へ提案内容の紹介を行い、広く意見をいただきました。



● 充実したフィールドワーク、文献調査、プロトタイプ

活動期間中は課題内容への理解を深めるため、文献調査とともに現地でのフィールドワークを行い、現地で行われている活動への参加やインタビュー等を実施しました。綿密な調査を通じて課題を問い直し、課題そのものだけでなくその背景へも洞察を深めました。教室に留まらないフィールドワーク、何度も繰り返した議論、アイデアのプロトタイプングを通じて問題の本質へアプローチする提案を目指しました。

